

## 心理學と客觀的方法

檜崎 淺太郎

### 二 心理學の對象(承前)

精神過程の意義をかくの如くに解釋すると、ヴァントを初め其の他の多くの學者とともに、心理學は精神過程を研究し其の法則を求むる一種の學であると言ひ得る。

今日心理學の對象を精神過程以外に認めんとするものも、往々あるがこれは、心的現實の原理を否定するものか、或は唯物的傾向の人々である。精神過程以外の方向より心理學を樹立せんとする試みは、遂に心理學をして自滅の道に進ましむるものであることは、過去の唯物的心理學、精神物理主義の唯物的心理學、自然科学的見解の心理學の最後の結末を見れば自ら明かとなるのである。又現代の心理學者の中には、心理學の對象を變化し或は之を増補し、しかも猶之に心理學の名稱を與へんと欲するものもある。例へば心理學の對象を變更し、其の變更したる對象を研究せんとす

る一種の新科學に、從來の心理學の名稱を與へんと欲するものには、ワットソン(1)がある。勿論氏は又之を行動の學 Behavior とも云つて新しき名稱も附して居る。余は斯の如き新科學には新しき名稱を附して、其の研究の對象並に研究法の差違を明にせんことを要求して、學界に無用の論争の生起を減じたい。

又心理學の從來の對象の上に更に新なる對象を加へ、之を總括して心理學と名けんと欲する現代の學者の一例としては、ドッチ(2)を舉げることが出来る。余は心理學は他の科學と等しく研究の進歩と共に其の對象の漸次擴大増補せらるゝものなるを認むる點に於て、此等の學者と同一なるも其の増補せらるべきものは、當然從來の對象と其の根柢に於て、或は其の本質に於て同一者ならざるべからざること確信するものである。科學の發達を其の對象より見ると、科學の進歩するに伴ひ、其の對象の漸次に淨化せらるゝのを見る。心理學の進歩に見るも、其の對象の純化、従つて其の學的知識の純化は斯學進歩の一大特色である。然るにドッチは内省的事變の他に、内省的事變に伴隨せる物的現象をも心理學の對象に加へ、この異質的な兩現象を研究の對象とする科學を心理學と名けんと欲して居る。これは科學進歩の一般傾向に反する對象の不純化である。應用科學の見地に於ては、對象の不純化は却つ

て有利なことであらうが、純正科學に於ては、對象の不純化は絶對に排せねばならぬ。純正科學に於て心的並に生理的過程の結合を研究の對象とすることもあらうが、それならばそれに應ずる新しき名稱を附した方が研究上の便利であり又混雜も起らないであらう。

この見地から見るとフヒネルの精神物理学(3)ザントの生理的心理學の第一版の見解(4) > 頁、(5)二六三頁)は正當である。即ち兩者とも neues Gebiet を研究するのであるから、其の科學に新しき名稱 Psychophysik : Physiologische Psychologie を與へて居る。

ドッヂもこの點に留意し、若し内省的意識の事實を記載するのが心理學であると主張する人があるならば、心理學なる名稱をそれ等の人々に献上した方がよいかも知れない、さうするならば吾人は他の科學即ち人類の經驗・行爲及び人格のあらゆる條件の全體を研究する科學を建設せうと云つて居るが、この見解が當を得て居る。されども、氏はかゝる科學にこそ、心理學なる名稱が適當であると思ふと附加して、心理學の對象に異質的なるものを加へんと試みて居ることは次の文章を見れば明である。

It may be that after all it were better to surrender the name psychology to those who believe that it applies only to a description

of the findings of introspective consciousness. If so then let us candidly confess allegiance to another science — a science of the conditions of human experience, conduct and personality ..... Personally I believe that the proper name for such a science is Psychology, the science of the highest principle of organization of human life. (2117頁)。

ドッチは従來の心理學の對象に異質なるものを加へ、従來用ひられたる心理學の概念を變更して之を Psychology と名けんと欲して居るが、これは謬つて居る様に思ふ。バルメリーは、ドッチが研究の對象として居るが如きものを研究し、其の科學を The Science of Human Behavior と呼んで居るが、余はバルメリーの方が當を得て居る様に思ふ。(9)。

精神から實體的概念を除去し異質的内容を棄てて現實活動の原理に於て心的體驗を研究せんと欲するならば、純粹なる心理學の對象は精神的過程なりと信じて大過はあるまい。それならば、かゝる意味の心理學と客觀的方法とは如何なる交渉を保つであらうか。

### 三 成人心理學の材料蒐集と客觀的方法

967  
心理學の對象を精神過程なりとせば、眞に其の過程の研究に最も有力なる研究資料は、之を成長せる正常なる個人に求むるを適當と爲す。従つて成人より得たる材

料より成る成人心理學は、他の材料より成る心理學よりも一層確實であり、従つてあらゆる他の心理學の中堅となるべきものである。余は茲にこの成人心理學の材料蒐集の方法につきて考へて見たい。成人心理學は別つて二種となすことが出来る。其の一は個人の正常なる精神過程の中、特に普通の意義 *allgemeinmütige Bedeutung* ある方面のみを研究の對象と爲し、個人的差異の方面は看過するのである。ヴントは之を個人意識の精神過程の標式的方面 *Typische* と呼び、この方面を研究の對象とせる心理學を個人心理學 *Individualpsychologie* 又は一般心理學 *Allgemeine Psychologie* と名けて居る(⑦一六八一—一六九頁)。其の二はヴントの所謂標式的精神過程より脱越するもの、換言せば各個人に特有なる精神過程を研究の對象とするものである。余はステルンの命名に従ひ、一般心理學に對し、之を差異的心理學 *Differenzielle Psychologie* と呼びた(⑧一頁)。ヴントは之を性格學 *Charakterologie* と名けて居る。(⑦一六九頁)。(差異的心理學は、り科學と成り得ないではないかとの疑問も提出せられて居るが、茲には之には觸れない) 即ち成人心理學中、一般心理學は心的過程の一般的特点に留意し、差異的心理學は心的過程の差異的特点を撰擇して、研究の對象と爲し、兩心理學の完成を待ち初めて成人心理學の完成が期待せらるゝのである。成人心理學から見れば、この兩心理學は同位にありて、從屬的關係はないが、而し研究

或は發達の順序より云はゞ、一般心理學は先にして差異的心理學は後より完成せらるべきものである。材料上より見れば、最初素材を得る際には、兩者の心理學に於て何等の差違もない。其の素材を撰擇するに當つて、一は一般的特徴を標準として、其の一般的特徴ある材料のみを撰び、他は又一般的特徴を標準と爲して、それより異なる特徴の材料を撰ぶのである。故に兩心理學は第二段に至つて差違を生ずるのである。然らば成人心理學の素材を得るには如何に爲すべきであらうか。

希臘時代以來内觀を主として居る心理學では、自己の心内の現象を觀察分析すれば、それによりて、一般に人間の精神現象を明にすることが出来ると信じて居た。而して其の内觀の確實性につきて疑惑を抱くものは尠なかつた。けれども自然科学の様に實驗を行ふことが出来ないから、近代の自然科学の如き精確科學となることの不可能なことも了解せられて居た。

カントは純粹な内的直觀には時間の一方向しか無いから内的經驗の現象には數學が應用出来ないのと (*Mathematik auf die Phänomene des inneren Sinnes und ihre Gesetze nicht anwendbar ist*, . . .) (四七一頁) 他方心的現象は多様であつて、之を任意に變化して觀察することが出来ない、換言せば心的現象には實驗を施すことが出来ないもので、到底實驗學に成り得ない、*nicht einmal psychologische Experimentallehre* (四七一頁) との理由で、心理學は精確科學の地位に登ることは出来ない、唯精神の性質記述 *eine Naturbeschreibung der Seele, aber nicht Selenwissenschaft* (四七一頁) として留まらねばならぬと論定した。カント以後の學者はカントのこの見解を犯す可らざる眞理と

考へ心理學は久しくこの思想に支配せられて居た。けれど自然科學が實驗方法を用ひて目ざましき成績を擧げて居るから、心理學にも之を應用したら非常に利益があるであらう、又どこかして之を利用したいとの要求は、心理學の新なる發達中、殊に十九世紀に入りて屢々唱導せられた。されど十九世紀の初頭にありてはヘルバルトすら、猶心理學に實驗法を適用したいけれど、人間を實驗することは出来ない、而して又實驗の器械もないから、一層數學を適用しなければならぬ *Die Psychologie darf mit den Menschennicht experimentieren; und kinstliche Werkzeuge giebt es für sie nicht. Desto sorgfältiger wird die Hilfe der Rechnung zu benutzen sein.* (10 九頁)と論じ、傍ら生理學の概念にて心理現象を類推すれば、多少得る所があらうと論じて居る位の有様であつた(10 一〇頁)。

然るに其後に至つて、主として生理學者の方から心理學的問題を生理學的方法に依つて研究する様に成つた。されど眞の實驗心理學的研究に達するまでには、生理學的並に精神物理學的なる二段階を経過しなければならなかつた。生理學的段階に於ける實驗心理學は、カントと全く同一の意味に於て、內的經驗に對する實驗法の適用を否定し、心的事變の生理的基礎の研究を以て其の任務なりと爲して居た。又この見解と結合せる他の見解は、精神の生理的基礎を研究することが、精神其の者を研究する唯一の正確なる方法なりと考へられて居た。此の見解の下に輸入せられた實驗方法は、心理學の研究に對して何等の進歩を與へざりしのみならず、この見解の下に探求せられたものは、精神作用と比較的に直接の關係ある生理過程に過ぎなかつた。研究者の態度は心を研究せんと欲して居たのかも知れないが、併し其の取扱つた對象は如何なる意味に於ても心理學的なるものではなかつた。唯實驗心理學と云ふ假面を着た腦髓生理學であつた。

精神物理的段階の實驗心理學はフエネルの精神物理學を以て其の代表者とすることが出来る。この時代の實驗心理學は、前段階の思想と等しく、眞の心的領域に實驗の適用を爲すことは全然不可能と考へて居た。或は少くとも其の當時に於ては絶対に其の適用の不可能を信じて居た。されどある心的過程、殊に最も單一なる心的過程は、常に物的條件に依存して居る。例へば感官感覺は感官刺激に依存せるが如き其の一例である。此の段階の學者は此の既知の事實から出發した。即ち自然科學の實驗方法を適用し得る純物理的相互作用の外に、如何なる科學的實驗も施すに由なき純心理的相互作用があるが、更にこの外に第三の領域として精神物理的相互作用 *Psychophysischen Wechselwirkungen* がある。この領域に於ては自然科學と同様の實驗的方法が適用出来ると信じたのである。即ち感覺の依つて生ずる物理的方面は、吾人の任意に變化せしむることが出来るのみならず、其の測定も可能であり、且つ感覺的方面は物理的條件に對して一定の函數的關係があるから、數量的研究が出来ると假定した。そしてこの學の研究の對象は、精神と物體との函數的關係であつた。此の段階の實驗心理學は當時の物理學を其の模範となし、物理的法則に對立すべき精神物理的法則を發見せんと企てたのである。

けれども嚴密なる意味に於ける函數的關係は、常に唯、同一種類の特徴間にのみ可能であるから、心的なるものと物的なるものとの間に函數的關係は成立し得ない。従つて物理的法則に對立すべき精神物理的法則を探求せんとする多くの努力は遂に年を経るに従ひ、無効なることが明になつた。この事實はヴントも明に承認して居る。(11)八九頁)

然らば如何なる意味、如何なる方法に於ても、精神に實驗的方法是適用出来ないで

あらうか。ヴントは眞の意味の心理學的實驗の可能を主張し、又この可能なる心理學的實驗によりてのみ、心理學は正確なる科學となり得ると論じて居る(4)二三頁。ヴントの所謂眞の心理學的實驗と稱するものも、其の時代によりて異り、又少くも其の實驗に對する主要點の變更せられ居るを認め得る様である。余は心理學に對し客觀的方法の交渉する點を、ヴントの比較的以前の著述を材料として考察を進めたい。換言せばヴントの現在を標準として、氏の過去を批判することによつて、余の問題を考へて見たい。故に時々ヴントの過去の見解を批判することもあらうが、之はヴントを批判するの意は毫もない。唯ヴントが過去に有して居つた様な思想が猶今日の心理學の研究法に混入して居ることもあるから、之を批判したのである。ヴントを引き合ひに出すのは、唯論材を得るためのみである。

余は最初自己の常用し來りし客觀的方法に疑問を起し、次に心理學の對象の性質の如何なるものなるかを理會するに苦み、漸くヴントの論理學(7)に據りて心理學の對象の輪廓を描き、この見地の下に客觀的方法を批判して、直覺的に否定的の傾向を有する様になつた。されど多年の年月と多くの學者の努力とに依つて漸く發達し來りたるこの客觀的方法を、直覺的に否定してはならない。慎重なる研究を要する。

そこで、心理學に初めて生理學的方法を輸入し之を完成して遂に實驗心理學を建設したるヴント、現代心理學の先驅者にして尙且つある意味に於ける斯學の集大成者たるヴントは、生理學、天文學等より借り來りたる客觀的方法を如何なる見解の下に心理學に導入し來り、如何なる方法に於て心理學の研究に利用せしか。又氏は自ら輸入したるこの客觀的方法を後年まで持續し得たであらうか。或は之をある時期に於て、ある理由の下に放棄せざるを得ざるに至らざりしか。客觀的方法の心理學的意義を研究するには、この方法を心理學に輸入し發達せしめたるヴントの客觀的方法に對する見解を考察するより始めるのを、最も手近くして有功な道と余は信ずるのである。かくの如く考へて、余は心理學の方法論的意義に於て、ヴントの初期の著述に俄に新なる興味を起した。而してヴントが實驗心理學の方法に初めて確固たる基礎を與へたと自ら稱する(71-72頁)著作『感官知覺の學說に關する貢獻』(12)を讀みて、初めてヴントの心理學研究方法の根本概念を掴み得た様に思ふ。以下この著作に基き、心理學の客觀的研究法の發達の初期の見解を考察して見た。

この論文はヴントが一八五八年から一八六二年に涉り、醫學雜誌 *Zeitschrift für rationale Medizin von Henle und Pfeufer* に掲載したものであるが、其の後一八六二年に至りて

VorredeとEinleitungとを加へて一冊の書物として出版した。此の本のVorredeとEinleitungとを見ると、ヴァントが其の當時心理學の研究法につきて如何なる見解を有して居つたかといふことがよく解る様に思はれる。又この論文の中に、ヴァントが後年に至つて爲し遂げた心理學的研究のプログラムも、已に其の輪廓が畫かれて居る。其の翌年即ち一八六三年に出版せられた『人類及び動物心理學講義』Vorlesungen ueber die Menschen- und Thierseeleには、更にそのプログラムが一層詳細に示されて居る様であるが、而し其の主要問題と其の研究方法は前のBeiträge zur Theorie der Sinneswahrnehmungに明に示されて居る。ヴァントはこの論文とフエネルのPsychophysikとを基本として人類及び動物心理學講義を述作したことは、氏の該書の二版のVorwortに明言して居る(13頁)。そしてこの講義が基礎となつて、氏の大著生理的心理學が一八七四年に出版せられたのである。して見れば、ヴァントの心理學的思想發展の基本的方面を見るには、この著作より進むを適當と思ふのである。

ヴァントはこの書のVorredeに於て言ふには、

心理學者が心理學の研究に於て假定以上に進むことの出来ない理由は、研究方法に缺陷があるからである。然るに生理學の方面には優秀なる方法が澤山あるが、生理學者はこの

方法は精神現象には適用が出来ないと思つて居る。自分は心理學的方法と生理學的方法とを合一せしめんと企た。即ち純心理學的のものとして、知覺の問題を捕へ、この知覺過程を心理的要素の過程に分析せんと試みた。そして之を爲すに形次的の思辨の助を借りないで、生理學者の實驗法を以てしたと、*Ich habe versucht die beiden getrennten Wege zu vereinen: ich nahm das Problem der Wahrnehmung als ein psychologisches, ich suchte bei der Zergliederung der Wahrnehmungsvorgänge die elementaren psychischen Prozesse auf, aus denen sie hervorgehen, aber ich suchte sie nicht mit Hilfe nachphysischer Spekulationen sondern mit der experimentellen Methode des Physiologen* (21) V. 頁)。述べて居る。

ヴントが心理學の實驗的研究に於ける問題の取扱ひ方は、實に上の數語に盡きて居ると云つて差支へない様である。即ち心理學の複雑なる問題をば出来るだけ單一なる特殊の場合の内に捕へ、之を解剖學的分析的精神に導かれて、要素に分解して、現實的、複雑ある現象が如何にしてこの要素的現象から構成せらるゝかを明示せんと試みるのである。そしてこの複雑なる現象を要素に分析すること *Zergliederung* が氏の科學的研究の第一歩であり、而して之を行ふ手段としては思辨を排して所謂生理學的方法即ち客觀的方法に依たのである。ヴントの此常用の方法は氏の他の著述の至る所に見出される。例へば精神作業を下の如く純心理學的に定義しながら、

(Mit dem Ausdruck > geistige Arbeit < im weitesten Sinne bezeichnen wir alle die komplexen psychischen Vorgänge, deren Wirkungen in gewollten und Planmässig erstrebten geistigen Werken bestehen. (14 五八九頁)。この複雑なる心的

過程を研究するに出来るだけ單一なる場合(例へば、言葉又は文章の記憶或は單位數の加算)を撰び其の客觀的特徴(例へば記憶したる内容の量或は一定時間に仕し遂げた加算の數)を實驗的に測定し、その結果を基礎として複雑なる心的過程の分析を行はんとして居る。そしてかゝる方法が過程の分析に最も適當なものであると論じて居る。(So werden gerade jene einfachsten Formen geistiger Arbeit,..... am ehesten zur Analyse dieser Vorgänge sich eignen.) (14) (五八七頁)。ツントはかゝる方法の可能を稱して、心理學に自然科學的方法の適用可能 Anwendbarkeit der naturwissenschaftlichen Methodik in der Psychologie (13) (V頁)なりと云つて居るが、果してかゝる方法によつて純心理學的過程が要素に分析出来るであらうか。若し出来るとせば、如何にしてそれが出来るのであらうか。

ツントはこの點に就きては『感官知覺の學說に關する貢獻』の緒論に詳論して居ると云つて居るから (Ich bin e mir deshalb rühmt in die Einleitung, die ich der besonders Ausgab dieser Beiträge vorangestellt habe, mich über der allgemeine Anwendbarkeit der naturwissenschaftlichen Methodik in der Psychologieausführung her auszusprechen. (12) (V頁)) 此の緒論の思想を探つて見たい。

緒論は二十二頁より成り『心理學の方法に就きて』(Über die Methoden in der Psychologie

と題してある。この緒論に於てヴントは科學の進歩の原因につきて考察を加へ、その基礎の上に心理學の進歩を計らんと試みて居る。其の説く所は次の通りである。

自然科學の歴史を觀ると、科學の進歩は研究方法の進歩と密切に結合し、科學の新しき結果が導き出された場合には、必ず從來の研究法の改良或は新なる研究法の發見が必ず其の前に起つて居る。然るに自然科學として心理學 *die Psychologie als eine Naturwissenschaft* を見ると、ベーコン及びガリレイ以來面目を一新したる物的科學の進歩影響は少しも受けないで、舊態を守つて居る。カントは嘗て論理學を評して、論理學はアリストートル以來少しの進歩もしなかつたと云つたが、この語は直に心理學に對して與へることが出来る。加之論理學は少くも舊態を維持して居たが、心理學は種々の點で著しく退歩して居る。心理學者が非常なる興味を以て迎へた問題は、精神の構造、座所、起源、未來の運命に關する問題であつて、而もこの問題が解決せられなければ、精神生活の現象 *die Erscheinungen des Seelens* は根本的に理會が出来ないと考へて居る。

けれども此等の問題の多くは、自然科學的心理學 *naturwissenschaftliche Psychologie* に屬するものではなくして、形次上學 *Metaphysik* に屬するものである。精神の本質及び精神と物質との關係に關する問題は、心理學の背面に残さるべきものであつて、科學的心理學 *wissenschaftliche Psychologie* の問題ではない。若し心理學がかゝる問題に引き懸つて居るならば、同一の圓の上を彷徨する様な結果に導くのみである。今日の物理學は、物質の本質に關する問題に思辨を費すことを排して、現象の多様性 *die bunte Mannigfaltigkeit der Erscheinungen* 其の者を研究の對象として居る。何故心理學は自然科學の範に從はないのであらうか。Warum folgt die Psychologie

nicht dem Beispiel der Naturwissenschaften? 精神現象の一團は、それ自身で一の纏つたものであり、且つ獨立の科學的研究が施され得る。Die grosse Menge der Seelenerscheinungen ist in sich so abgeschlossen, dass sie recht gut einer unabhängigen wissenschaftlichen Untersuchung fähig ist. 然るに今日の心理學は、秩序と聯絡の無い事實の重疊に過ぎない。そしてアリストートル時代の心理學と同一である。

かゝる幼稚なる心理學を意識の事實の科學とするには、他の科學の爲したと同一の精神に基きて、複雑なる現象を分析して單一なるものと爲し、その單一なるものの結合を可能ならしむる法則を探らねばならぬ。元來意識現象も、又他の自然現象も、吾人の觀察に直接に現はれた所では、極めて複雑なものであつて、其の單一なる要素は隠されて居る。この單一なるものを發見するに、解剖學は顯微鏡的並に發生學的分析によつて、其の形態の始源狀態を明にし、且つ其始源的形態の結合して組織及び有機體を構成する法則を探究した。之と同様に心理學が形次上學的假定から脱却して、其の學固有の法則の上に成立せんとするには、精神現象を其の發現の發端に於て固定し、その分析をしなければならぬ。而して一般心理學の研究に對して補助となるべき二種の科學は、即ち精神の發達史及び比較心理學 *Entwicklungsgeschichte der Seele und die vergleichende Psychologie* である。精神の發達史を研究すると、人類に於ける精神生活の發達の有様を探究することが出來、比較心理學の研究は人類と動物とに於ける精神的差異が明となる。若し熱心にこの方面の研究を遂行したならば、測る可らざる進歩が起つたであらう。實際に於て心理學はこの補助科學の方面の研究にも着手はして居つたけれど、偏見に捕はれ正しき方向に進で居らな (12) VI-XVII頁。

茲でゼントが精神の發達史といふのは、後年の民俗心理學を指示して居るので、比

較心理學とは主として動物心理學の意であらう。

上述のヴントの心理學の研究法の見解を見ると、ヴントは心理學の研究對象及び其の研究方法の模範を解剖學 *Anatomie* に認め、解剖學の活範に則つて心理學を研究せんと企てたのであらうと推定することが出来る。即ち解剖學の中堅となるべき研究法は形態の顯微鏡的分析 *mikroskopische Vergleichung*<sup>(12)</sup> <sup>(XIV頁)</sup> であるが、之に應ずる心理學の主要ある研究法は意識の實驗的分析 *experimentelle Vergleichung*<sup>(12)</sup> <sup>(V頁)</sup> である。又解剖學の二大補助科學は、發生學と比較解剖學であるが、ヴントはかくの如く明白には述べて居ないが當時の解剖學の状態からかく考へて居たと推定せられる。而してヴントは前に述べた如く、解剖學の主要なる研究として *embryologische Forschung*<sup>(12)</sup> <sup>(XVI頁)</sup> を舉げて、比較解剖學は省略して居る之に應ずる心理學の二大補助科學は、上に述べし精神の發達史と比較心理學である。かくの如くに、ヴントの心理學の研究法を解剖學の研究法に對應さして理會すると、ヴントの心理學研究法の根本精神が余には頗る明となる様に思はれる。而し形態を研究の對象とせる解剖學と内觀的現象を對象とせる心理學とは、其對象の性質に於て著しき差違があるのに、形態の研究法に準じて内的過程を研究せんとせば、兩者の研究法にどれだけの類似が保ち

研究法		學科	
		心理學	解剖學
主要なる研究法		實驗的分析	顯微鏡的分析
補助的研究法		精神の發達史的研究 比較心理學的研究	形態の發生學的研究 比較解剖學的研究

レントは精神の發達の最も重要な要素として感覺及び知覺の成立 *die Entstehung der Empfindung und Wahrnehmung* の問題を捕へて之に考察を加へて居る。

心的及び物的事變の領域が、感覺に於て相互に接觸して居り、感覺刺激が如何にして感覺を生ずるか、心理學及びあらゆる哲學的思辨の基本問題であるが、これは容易に解決せられ相もない難問である。然るに知覺 *Wahrnehmung* は、最初の恐くは最も單一な純心理的性質の活動 *die Wahrnehmung ist die erste und vielleicht einfachste Verrichtung rein psychischer Art* である。この知覺の問題を解決することが、又やがて感覺の成立の問題とも關係を持つて來る。

かく考へてレントは知覺の研究に着手した。

ヘルムホルツはジョン、スチュアルト、ミルの論理學の問題に興味を感じて、空間知覺の生理學的研究を行ひ(15二〇頁)、フェヒネルはシェリングの自然哲學の問題より出發して、物的世界と心的世界とを内的に結合する普遍的法則を發見せんとして所謂精神物理學を建設し、遂に刺戟の強度と感覺の強度との關係に關する法則を確定し心理

得らるゝか。心理學は其研究法を形態の研究法に準ずることによりて、恐るべき岐路に迷ふ様になりはしないか。

學の量的研究の方法を發達せしめた<sup>(15)</sup>二〇五、二〇六頁(一一五頁)ことは誰しも熟知のことであるが、ヴァントはヘルムホルツ、フュヒネルの研究方法を改良して、兩氏が直接の目標としなかつた純心理學的問題に突入した。

ヴァントは心理學の研究方法を改良すべき手段を發見せんがため、從來行はれたる心理學の研究方法を自然科学的標準に依つて、批判し、その缺陷を指摘し新なる研究方法を次の如くにして輸入した。

心理學に於て從來用ひられた研究方法は、自己觀察と、形次上學的假定から精神生活の現象の嚮導 *die Selbstbeobachtung und die Ableitung der Erscheinungen des Seelenlebens aus metaphysischen Hypothesen* との二つであつたが、前者は現象の極小部分しか執ふことが出来ないし、後者は原理の上から排斥しなければならぬ。

あらゆる心理學は自己觀察から始まり、而して自己觀察によるにあらざれば、吾人の外に存在する心的現象を判断することは到底出来ない。されど現象の起源及び其の原因 *die Anfänge und die Ursache der Erscheinungen* を探究せんと欲すると、自己觀察は頗る不十分な結果しか與へない。自己觀察は意識の事實 *die Thatfachen des Bewusstseins* 以上に進むことが出来ない。自己觀察の上に建設せられた心理學は、意識の事實を以て始まり意識の事實を以て終らなければならぬ。意識の現象は無意識的精神の複合せる産物 *die Erscheinungen des Bewusstseins sind zusammengesetzte Produkte der unbewussten Seele* であつて、唯稀に自己觀察から其の構造を直接に推知することが出来るのみである。自己觀察の上に建設せられた心理學は、普通之を経験的心

理學 empirische Psychologie と名けるが、この心理學は、意識の事實の秩序なき配列 ordnungslose Anordnung der Thatsachen des Bewusstseins に限られなければならぬ。のみならず、此心理學は意識の事實の內的結合 in innere Verknüpfung dieser Thatsachen を發見し得ないから、精神の結合體を分離せる個體の一群に分割する。従つて經驗的心理學は精神の活動的表現を、特別なる精神能力の表現と見るに至るのである。従つてかくの如き心理學では、全體 das Ganze は全く個々の現象の内に消えてしまつて、相互の聯絡を失つた外的分離が現はれるのである。

之に反し、形次上學的假定から精神現象を嚮導すると、すべての精神現象は統一ある一の系統となつて現れ、個々の精神現象は、一々一定の位置を保ちて秩序整然たるものとはなるが、併し又他方で形次上學的基礎が動搖すると、全體の組織が直に瓦解を起す。元來心理學は形次上學的基礎の上に建設せらるべきものではない。寧ろ反對に形次上學が其の確實なる根柢として心理學を要するのである *umgekehrt die Metaphysik der Psychologie zu ihrer festen Begründung bedarf*。故に心理學の從來の研究法の一たる形次上學的研究法は排斥しなければならぬ。

心理學的事實を形次上學的基礎の上に組織せんとする試みと密接に結合せるものは、心理學の數學的取扱法 *mathematische Behandlungsweise der Psychologie* である。形次上學も數學も共に演繹法を使用する。そこで心理學を數學的に取扱ふと、已に以前からよく知られて居つたことを、一定の法式に纏めることは出来るが、然し之によつて新しき事實の發見も、又其の説明も爲すことは出来ない。けれど經驗的心理學が精神の全體を消滅せしめたに反し、數學的心理學 *mathematische Psychologie* は精神生活を全體として、個々の心的表現を統一的なる基本體の特殊の現象として認めしめる様に導いた。之れは數學的心理學の貢獻である。けれど

數學的心理学も形次上學的心理学と同様に、自己の科學其の者から演繹を爲さず、却つて他の全く無關係なるものに基礎を求めたのは大なる誤謬と云はねばならぬ。

かくの如く從來の心理学の研究法を批判して見ると、何れも皆不充分と云はなければならぬ。然らば如何なる方向に改良を施さなければならぬか。それには心理学の演繹法を排し、全然歸納法によりて、出來るだけ其の範圍を擴張しなければならぬ。之には二つの道がある。其の一は從來の觀察法の擴張であつて、其の二は研究の補助手段としての實驗の輸入、*der erste besteht in einer Erweiterung der bisherigen Beobachtungsmethode, der zweite in der Einbeziehung der Experimentals Untersuchungsmitel* である。

個人の心理學的觀察の結果を民俗の生活に押し及ぼして、*Gesellschaftslehre* が成立したが、併し今日では、この科學は心理學的事實から脱却し統計法によりて蒐集した多數の事實の基礎の上に建設せられんとして居る。Nationalökonomie は統計的研究の補助によりて、始めて固有の法則の上に成立する *wahre Naturgeschichte der menschlichen Gesellschaft* と成つた。茲に於てこの學と心理学との關係は逆となつて來た。即ちこの學が統計的方法により得た事實の一團は、直接に重要な心理學的推測を爲すに適するものと成つた、*eine Menge Thatsachen, die unmittelbar zu wichtigen psychologischen Schlussfolgerungen geeignet sein*。斯かる意味に於て、この新なる統計法は心理学に對して極めて豊富なる材料を供給するに至つた。この方法は心理学に對して新なる者と與ふるのみならず、又動かすべからざる確實性を與へ得る。

Es kann aber auf diesem Wege für Psychologie nicht nur Neues gewonnen werden, sondern es hat diese Methode auch den unendlichen Vortheil, dass sie an die Stelle vager Vermuthungen eine unerschütterliche Gewissheit setzt, dass sie nicht unbestimmte Folgerungen sondern Schlüsse mit mathematischer Sicherheit zu ziehen erlaubt. (21) XVII—XXV 頁

ヴントはかくの如くに論じて、心理學の研究方法に、客觀的研究法の一たる統計法を移入せんと欲して居るが、統計法によつて得らるゝものは如何なる性質の心理學的知識であらうか。ヴントは統計法によつて新しきもの *Neues* が得らるゝと云つて居るが、この新しきものゝ性質は如何なるものであらうか。氏は、心理學の統計的研究の一例として自殺の研究を擧げて居る。今此の研究の一例につきて所謂ヴントの新しきものとは如何なる性質のものであるかを考へて見たい。

自殺の外的原因は從來一般に心理學者に知られては居つけれど、その推論は多くの偶然的要素を含蓄せる僅少なる場合からなされたものであるから、頗る漠然たるものである。然るに統計的結果は、大多數の事實の上に推定せられたものであるから、より大なる確實性を有し、且つ本源的要素の比較的頻數 *die relative Häufigkeit der ursächlichen Momente* を數量的に確定が出来る。加之この統計法によれば、自殺の遠因 *die entferntern Ursachen des Selbstmords* を知ることが出来る。即ち年齢、性、國民性、職業、氣候、天候、四季、其の他の外的要素が自殺の發現に對して一定の原因的作用を營むことは、統計的研究によつて初めて知らるゝのである。勿論統計的事實は、實際的心理學に對してのみ重要な意義を有するのであつて、精神現象の學說に對しては意義を持たなす。Freilich sind die statischen Thatsachen zunächst nur von Wichtigkeit für die praktische Psychologie, nicht für die Theorie der Seelenscheinungen. 併し吾人は實際的心理學から出發しなければならぬ。人類の生活の重要な運命が、如何なる要素によつて規定せられ居るかを、吾人に確實に指示するものが、統計的研究であるとすれば、統計法はこれだけの效力だけで、已に大

なる價値がある。吾人は日常觀察の事實を統計的に整理して、初めて心理學に有用且つ重要なる材料を構成し得るのであるが、心理學に對する統計法のかくの如き意義は、今日まで吾人の充分に評價し得なかつたものである。統計的報告は、アリストートルを除く他のあらゆる哲學者よりも心理學に對して教ゆること更に大である(12) XXV—XXVI頁。

ヴァントはかくの如く考へて、心理學研究の重要な補助手段 Hilfsmittel として、統計法を採用して、觀察の範圍を擴張せんと試み、其の後の實驗心理學は、直接又は關係にこの統計法を利用しないものは無いと云つてよい位に重要な研究方法となつて居る。例へばヴァントの直系中に於て一頭角を現はしつゝあるキルトの精神物理學は、實驗心理學の諸方法を網羅して居るが其の大半は統計法の詳細なる記述である(16)。以てキルトが統計法を如何に重要視して居るか、察せられる。

然らばこの統計法より得られたる結果はその者として如何なる性質の知識であらうか。又統計法と知識の確實性との關係は如何なる者であらうか。この二問に對して、前に記したるヴァントの自殺の統計的研究の例に依り、後者より考へて見たい。ヴァントは自殺の多くの場合を統計的に研究すると偶然的要素が除去せられ、従つて本源的要素を發見せられ得るのみならず、之を數量的に確定せらるゝから、知識のより大なる確實性を齎らすものである *die Statistik hat hierin grössere Sicherheit gebracht*

(12) KAYE 頁と斷定して居るのが、若しこの研究が自殺者自身の自殺の原因の内觀的事實を多數集めて、統計的整理を加へたものとするならば、ある特定の内觀的原因が他の原因よりも其の數量に應ずるだけ自殺を生ずる頻數の多いといふことを斷定し得るであらう。そしてこの斷定し得たことは、ヴェントの云ふ如く内觀だけでは到底達し得られない所謂一種の *Tenes* である。我々は之に依りて、最大頻數を有する自殺の本源的原因を探索し得たのである。而し、ある特定の原因が最大頻數を有するといふ事實即ち *die relative Häufigkeit* 其者は已に内觀の事實意外のものである。夫故に内觀によつて知り得られないことは當然である。内觀以外の事實なるが故に、かゝる結果が二項に述べたる如き意義の心理學の材料には直接には成り得ない。個人心理學の材料は、内觀の事實に求めなければならぬ。従つて自殺の原因の純心理學的研究に就ては、自殺の内觀的原因の發見が主要なるものとなる。唯多くの個人に現はるゝ自殺の内的原因が相互に異なる場合に於て、その何れが頻數最も多く其の何れが頻數最も少きか、換言せば内的原因の比較的發現度數を知らんとする時に、統計法の援助を要するのである。而し内的原因の比較的發現度數は、純心理學的問題ではなく、純心理學的問題と密接なる關係を保つ別種の學の問題である。普通には

發現度數の最も多い原因を以て、其の事變の眞の原因と考へて居るが、發現度數が眞の原因と皮相的原因とを區別する標準とは成り得ない。自殺の眞の心理的原因は、内觀を極めて精密に施し初めて發現し得らるのみである。斯の如く内觀によつて自殺の心理的原因が知られ得るとするも、その原因のツントの所謂標式的 *Typische* なるものを、如何なる標準によつて定めるか。

ツントの個人心理學の對象は個人意識の普遍的意義を有するもの、換言せば精神過程の標式的方面であることは、前に述べた通りであるが、而しツントはこの標式的なる意義を余の知る限りでは明確に記述して居ない様である。しかしツントはこの標式的精神過程より脱越するものを、研究の對象とする心理學を性格學と名けて個人心理學に對立せしめて居る所から推定すると、標式的精神過程とは各人に共通の精神過程と解釋することが出来る。ある過程が各人に共通する點に於て、其の過程が普遍的意義を有するに至るのであらう。普遍的意義を有する意識過程或は、標式的精神過程をかくの如き意味に解釋すると、標式的精神過程なりや、否やを決定する唯一の標準は、該過程の比較的發現度數によるの外はない。而して發現度數の算定は、云ふ迄もなく統計法によらなければならぬから、心理學の研究に統計法は缺

ぐ可らざるものである。缺ぐ可らざるものではあるが、而し眞の研究法或は主要なる研究方法ではない。主要なる研究法より得たる結果の整理上の一補助法に過ぎない。研究方法に於て主要なるものと副次的又は補助的なるものとを常に峻別するとは、科學研究の方法論上に於ては極めて大切である。ある方法が他の方法に對し上位となるか同位であるか下位になるかは重要な意義を有する。自殺の原因の心理的研究に於て、自殺者自身の内觀は主要なる研究法であつて、之が統計的研究は、内觀法に對し同位にあらずして、下位の地位を保つべきものである。この關係は單に自殺の心理學的研究にのみ限らるゝものではない。一切の心理學的研究に於て、内觀法は上位に統計法は其下位に位すべきものである。ヴントが初期の心理學的研究方法として統計方法を力を極めて高潮しながら、後年に至り氏が主要なる心理學的研究方法中より統計法を削除したのは、當然の處置にして、又ヴントの心理學研究方法上の見解の變化を察せなければならぬ。キルトが精神物理學の研究方法として、統計法、再生法、反應法を對立せしめ、同位の價値を與へて居るのは、其文字の示す如き意味の精神物理學の研究法としては、恐く正當であらうが、ヴントが後年に於て考へて居るが如き實驗心理學即ち個人心理學の研究法として、他の二法と同位に統計

法を置くのは、大なる疑問でなければならぬ。余はキルトの精神物理学を未だ十分に精讀して居ないから、キルトの見解に對しては、疑問を提出して置く以上に進み得ない。更に尙統計法を詳細に研究したならば、或は統計法が個人心理学に對して内觀法と同位或は其上位に進み得る所以の意義を發見し得ることがあるかも知れないが、而し今日までの心理学研究上に用ひられたる統計法は内觀法の下位にあるべきものと言つて差支へがあるまい。統計法は個人心理学の性質上、必然的に内觀法の下位にあるべきものである。而し心理學的材料整理の際は、この方法を利用することに依つて、所謂標式的精神過程が決定せられ、これによりて、その過程が普遍的意義を實際有するに至るから、この點に於て統計法は心理學的智識に *grössere Sicherheit* を與ふるものであると云ふツェントの主張は至當である。

而し *grössere Sicherheit* が全然統計法によつて得られたのではなく、該精神過程は本來已に普遍的意義を有して居つたのであるが、内觀ではそれに普遍的意義を認むることが出来なかつたのみである。統計法は已に存在せるこの普遍的意義あるものを實際に發見せしめたまでの事である。故に若し誤謬ある内觀的事實を如何に多く蒐集して、之を統計するとも普遍的意義ある精神過程は到底發見することは出来

990

ない。ヴァントは自殺の外的原因の智識が統計法によつて *grössere Sicherheit* を得ると云ふが外的原因の研究に於てすら統計法適用前の自殺の個々の原因の精確なる探求これが最も重要なものと信ずる。この個々の自殺の原因中の何れかが已に普遍的の意義を有して居るのである。論理的に云ふならば *das Allgemeine* が個物に於て自己を已に現はして居るのであらう。詩人哲學者或は慧眼の士は之を直覺的に認識するが科學者は統計法によつて初めて之を確證するのである。尙突き込んで云はゞ科學者中の眞の科學者は、已に統計法を施す前に、其の普遍的原因を豫知してへ居るのであらう。果して然らば統計法はある智識に、それ自身のみにて *Sicherheit* を與るとは出來ないが、元來 *Sicherheit* を有するものに、經驗的に *Sicherheit* を與ふるものであると云つた方が、統計法の眞の意義をよく現はす様に思はれる。此關係は心的過程に關する卓拔なる詩人又は哲學者の智識と科學者の智識とを比較すると明白となるのである。ダンテ、シェイクスピア、ゲーテなどの作品或はアリストートル、スピノザ、ルソウ等の著書に散見せる心理學上の知識のあるものは、之を讀むものをして奥深き幽玄なる心の琴線に觸るゝを感じしめる。これ即ち其の知識の普遍的意義を有する確證でなくして何であらう。科學者は詩人、哲學者の暗示したるこの普

遍的精神過程及び其の他の多くの精神過程を蒐集し、之を統計法の助けによりて普遍的意義の想像的なりしものを、經驗的となして、之を科學的知識或は確實なる知識と爲すのである。この問題につきては、尙論理學的研究を要すること、思ふが、論理學的知識の乏しき余には之以上論ずる資格が無い。唯識者の示教を乞ふのみである。

心理學的知識の確實性と統計法との關係につきての余の今日の見解は、上の通りであるが、次ぎに統計法より得たる知識は如何なる性質のものであるか。次にこの問題を考へて見たい。

ウントは統計法を心理學に適用することによつて知識の確實性を増すのみでなく、自殺の遠因 *die entfernteren Ursachen* を發見せしむるものであると云つて、統計的方法で得たる自殺の遠因に年齢、性、國民性、職業、氣候、天候、四季及び其の他の外的要素を算へて居ることは、已に前に述べた通りである。而し此等は如何なる意味に於ても、自殺の心理的原因ではあるまい。心理的原因即ち其の原因が心的意義を有するためには、それが意識的事實とならねばならぬ。例へば暑さが嫌で堪まらないから自殺するといふ意識が生じて、初めて氣候が自殺の心理的原因と成り得るのである。然

るに若し其人が暑さが嫌になりて自殺したとするも、其意識が生じなかつた場合に、氣候は自殺の心理的原因ではない。其の場合には氣候は自殺の客觀的條件又は客觀的平行現象に過ぎないのである。従つてこの際、氣候は自殺の心理的事實に對して嘴を容るゝ權能を有し得ない。かゝる意味に於て、ザントの云ふ自殺の遠因たる氣候を初め、他の外的要素は、個人心理學の對象ではない。又此等の外的要素が自殺の發現と外的にある關係(多くは共存又は平行の關係を保つとするも、其の關係は外的偶然のものであつて、內的必然のものではない。換言せば心理的關係ではない。従つてかゝる研究の結果は個人心理學の材料とは成り得ないものである。そは前にも述べたる如く、個人心理學はその材料を個人の内觀的事實以外に求めてはならないからである。

從來實驗心理學の名稱の下に盛に研究せられたる——感覺と刺戟、感覺とエネルギー、感覺と溫度、濕度、感覺と其潛伏、發現連續の時間との關係、精神作業と光度、溫度、濕度、風の速度との關係等の研究も、其の兩者の關係を研究の對象とする限りに於て、個人心理學の領域外に出づるものである。何となれば此等の研究對象は、已に内觀的事實ではなく、又内觀によつて研究することは不可能な對象であるからである。勿

論かゝる對象の研究中に於て、感覺其者或は精神作業其者の知識を偶然増し得たこともあらうが、その際には測定法又は統計法の適用によつて感覺又は精神作業其者の知識を増したのではない。寧ろ測定法又は統計法適用の條件内に於て、細かな内觀が行はれた結果である。換言せば眞の意義の實驗的内觀が行はれた爲である。故に精神過程其者の研究でなくして、精神過程と物的現象との關係を研究の對象となす科學を要求するならば、かゝる科學は實驗心理學と名けるよりも寧ろフェヒネルの樹立せんと試みた精神物理學の名稱を其の儘に保存しこの名目の下にかゝる研究を益々發達せしめた方が適當の様に思はれる。併しこの點は更に深き考究を要する。前に述べたキルトの著述が、實驗心理學なる名稱を排し、精神物理學なる名稱を特に襲用したのは、余には、深き意義がある様に感ぜられるのである。

上に述べたる如き理由に基き、統計法によりて發見せられたる事實は、其儘にては精神的意義を有するものでは無くして、寧ろ物理的意義を有するものである。従つて物理的意義を有するものゝ研究に於ては、統計法を適用することによりて新しき事實を發見し得るのであるが、心的過程に對しては統計法を如何に巧みに適用したとて、如何なる心的過程も發見することは出来ない。従つて統計法は心理學の主要

なる研究法となることは出来ないといふ余は論定したい。

ヴントも統計法によりて心的過程が発見せられ得るとは考へて居ない。自殺の統計的研究の例に於ても、統計の結果から自殺の遠因が知られると云つて居る。この遠因の意義は明かでないが、今一の解釋を試みて見れば、此等の多くの遠因が個人の人格に影響し、この影響を受けたる人格が自殺を必然的に起さすのであるとも云へる。かゝる意味に於て自殺の遠因とは、自殺の外的原因 *die aussern Ursachen* を指示して居る様である。ヴントは統計法によりて自殺の外的原因を探求せんと欲し、而してかゝる研究を一種の心理學的研究と考へて居る。ヴントの心理學的研究の初期に於ては、心理的過程を外的原因の方向から突止めんと専心に努力して居る。換言せば客觀的方法によつて心理的過程の成因を探求せんとして居る傾向が甚だ強い。ヴントの心理學研究の此客觀的傾向は、其後年に至り、個人心理學の範圍に於ては著しく減殺せられて居るが、猶民族心理學の研究に於ては極度に用ひられて居る。ヴントが心理學の研究に、最初客觀的方法を使用したのは、主として解剖學の研究法の概念に基き生理學研究の手段を重に利用したのであらうが、而し他方に於てヴントが精神過程に對する一般見解にその根本的基礎がある様である。ヴントの云

ふ所によれば、

從來個人の觀察に利用せられた唯一の補助手段は歴史の研究であつた。而し歴史は個人の限定無き自由 unbestimmbare Freiheit des Einzelnen を重要な要素と認めるのであるから、個人の觀察に依り一層大なる確實性 grössere Sicherheit を與へなす。然るに之に反し、die Naturgeschichte der Menschheit を心理学觀察の補助にする時は、全然異つた關係が生ずる。この場合に於ては人類又は全體としての個々の民族の集團が、自然史的なる個人を規定し、従つて、この自然史的なる個人のあらゆる現象は全體の社會の状態に依存する。Die Menschheit oder einzelne

Völkerkomplexe als Ganze führen ein naturgeschichtliches Dasein, welches in allen seinen Erscheinungen von dem Zustand der gesammten Gesellschaft abhängig ist。かゝる状態に於ては、觀察の材料充分なる時は、大數の法則 das Gesetz der grossen Zahl が勢力を逞ふし、偶然又は個人の任意に歸着せしむべき個々の變異 einzelne Abweichungen は相互に消し合つて其の勢力を失ひ、自然史的法則 naturgeschichtliche Gesetz が完全に現はるゝに至るのである。(12) XXVI頁)。

である。

ヴントの此見解によれば、氏は個人の歴史的意義を排して、個人を naturgeschichtliches Dasein と見做し、環境の状態に束縛せられ居る者と考へて居る様である。ヴントは naturgeschichtliches Dasein の概念を詳細に記述はして居ないけれど、要するに個人を內的に精神的に見ずして、外の方から物的に考へて居ることは明である。個人を外か

ら見て、*naturgeschichtliches Dasein*と考へるならば其個人の有する精神も亦 *naturgeschichtliches*のものとなり従つて精神も自然現象となり、かゝる意味の精神の學は亦一種の自然科学とならなければなるまい。果せる哉、*ヴェント*は心理學と實驗的研究との關係を論じたる所に於て、次の如くに云つて居る。

*Schuld man einmal die Seele als ein Naturphänomen und die Seelenlehre als eine Naturwissenschaft aufzufassen, muss auch die experimentelle Methode auf diese Wissenschaft ihre volle Anwendung finden können. (12<sup>x</sup> × VII<sup>er</sup>)*

*ヴェント*が此の論文に於て、個人を *naturgeschichtliches Dasein*と考へ、*Seele*を *Naturphänomen*として理會して居るこの見解を、氏の眞の根本の見解と認むるならば、之に就きては議論があらうが、*ヴェント*の初期の心理學の研究方法は實に徹底したのである。*ヴェント*は個人心理學の研究法に於て統計法と實驗法(*ヴェント*初期の實驗法は客觀的事實より心的なるものを推定せんとする方法である、之は後項に詳説する積りである)とを用ひ、民族心理學の研究は民族精神の客觀的産物を因果的に考察することより出發して居るから、この兩心理學の研究法は其の根本的特徴に於て皆客觀的方法である。即ち*ヴェント*は、其初期に於ては精神に客觀的内容を與へ、之を研究するに客觀的方法を用ひんと欲して居るのであるから、氏の立脚地に矛盾はない。(余は*ヴェント*が

氏の初期に狙つて居る様な一種の自然科学的心理學が可能であり、この種の心理學の研究法は純客觀的方法で研究しなければならぬと思ふ、この點又後項詳細に考へ見る積りである。けれども若しこの客觀的内容を與へたる精神から客觀的内容を全部奪ひ去り、之に内觀的内容を與へ、之を客觀的方法で研究せんとすれば茲に大なる困難が生じて來る。この困難から免れんと欲するならば客觀的方法を全然放棄しなければなるまい。客觀的方法より幾分他に轉じ、猶一方に於て客觀的方法を維持するとせば、立場の混雜を起すに至るであらう。ヴェントの心理學の研究法の發達中には已に西田博士の指摘せられた様に(17)三五頁、立場の混雜がある様に思ふ。

かくの如くに精神を自然現象と考へ、客觀的方法を以て研究するならば、精神の自然科學的理會は可能かも知れないが、心理學的理會は斷念せねばなるまい。或は實體的精神は理會せらるゝかも知れないが、現實的な精神に觸れることは出來ないであらう。

現今の心理學的研究に於て徹底的に統計法を適用せる方面は、心能相關の研究領域である。この方面の研究は今日の客觀的團體的、數量的をも含む研究の結果を數學的統計法も含む考察の下に整理し、その結果の下に設定的心理過程又は心理作用

を假定し以て精神の本質を闡明せんと企てゝ居る。例へばスピヤマンの中心要素の研究の如きは其代表的なものである、<sup>(18)</sup><sup>(19)</sup><sup>(20)</sup><sup>(21)</sup>。スピヤマンは音、光、重に對する識別、學科成績、一般智力、加算、複合實驗、觸覺、記憶等の客觀的研究の結果に關係係數算出の公式 *Korrelationsformel* を適用して、關係係數 *Korrelationswerte* を算出し、其の相互關係から、此等各種の精神作用中に常に有力なる中心要素 *Zentralfaktor* の存在せざるべからざることを論定し、進で其の中心要素の性質を一九〇七年の研究に於ては精神物理的のものと解して神經系統の可塑的機能 *Plastische Funktionen* に基くものであらうと推定し、一九一二年の研究に於ては、之を *common fund of Energy* に歸着せしめて居る。

(22) 一〇一一〇五頁。

統計法を徹底的に適用して得た最後の結果たる此のスピヤマンの *Zentralfaktor*, *Plastische Funktionen*, *common fund of Energy* は現實的精神と内觀的に何等の關係を持ち得ない全然設定的のものである。従つて直觀的に知り得ないのみならず、内觀的事實を基礎に推定することも出来ないものである。スピヤマンはその中心要素に基きて内觀的なる諸知能を統一せんと試みて居るが、この試みはヘルバルトの觀念力學說の立て方と其の根本に於て全然同一である。即ち何れも實體的概念によつて

統一を與へんと欲して居る點に於て趣きを一にする。唯兩者の異なる所は、其の實體的概念を摺むに、前者は多數の客觀的事實の數量的整理の結果より推定したるものを以てし、後者は一種の形次上學的概念より演繹したる點にある。故にスピヤマンの中心要素説一般智慧説はヘルバルトの觀念力學説が受けたと同一の批難を免れ得ないであらう。けれども若しスピヤマンの中心要素説を客觀的事實の統一原理として考へるならば、この中心要素説は多數の客觀的事實の統計的處理によりて歸納したものであるから、廣き範圍に於て其の確實性を有し、極めて重要な學説たるの資格を得ることとなるのである。斯る研究が更に廣く一層確實に行はれた曉には、遂に設定的或は自然科學的心理現象の統一的體系を設定し得るに至るであらう。けれども個人心理學の問題に對しては直接に何等の知識をも與へぬのみならず、寧ろ心的なる者を設定せんとするに當りては必ずや個人心理學の援助を受けなければ、心的なる意義を得ることが出來ないであらう。スピヤマンの中心要素説が獨立に其の効果を發揮し得るは、余の今日の見解にては、行動學の上にあると思ふ。若し之を自然科學的心理學の上に進めんとするならば、個人心理學の援助を要し、更に個人心理學にまで之を適用せんと試むる時は、其の無力を曝露するのみならず、適用の

限界を無視したる譏を甘受しなければなるまい。

之を要するにウントが氏の初期に於て精神を Naturphänomen と理會した様に、其の本質的特徴たる内的自由を奪ひて精神を客觀的條件の產物と見做すならばかゝる意義 (naturgeschichtliches Dasein) の精神の研究には客觀的條件の精確なる測定及び之が數學的整理は極めて重要な方法となるであらう。而してこの場合に、統計法を利用すればウントの論定したる如く、材料の Neuesなるものも得らるゝであらうし、其の知識の Sicherheit も加はり其の事實の entfernteren Ansehen も發見し得らるゝであらう。そしてウントが最初に希望した如き、從來の觀察法の擴張 Erweiterung der bisherigen Beobachtungsmethode が實現せらるゝに至るのであらう。

けれども現實的活動の原理の上に建設せんとする個人心理學に統計法を輸入したからとて、觀察法の擴張にはならない。ウントの云つた様に、科學的進歩の本質的要素は、經驗界の擴張と、絶えず反省の新方法を發明する (It is therefore essential for scientific progress that the sphere of experience be enlarged, and new instruments of reflection from time to time invented. (13)八九頁) にあるのであらうが、而し自然科學に於て經驗界の擴張を起した統計法を、精神科學に適用したからとて直に精神的經驗界の擴張を起し得ると、速断してはならない。個人心

理學進歩の第一歩は、心理學的事實の増大にある。而してこの心理學的事實を發見せんとせばウントの云ふ如く *Erweiterung der bisherigen Beobachtungsmethode* を仕遂げねばならぬ。けれども之を爲すに自然科學に於てこの目的を達するに有功であつた方法を、直に持ち來つてはなるまい。後年ウントの云つて居る様に (We must remember

that in every department of investigation the experimental method takes on an especial form, according to the nature of the facts investigated. (13) 一〇頁) 研究方法は研鑽せらるゝ事實の性質に依つて特殊の形式を採らね

ばならぬ。吾人は吾人が心的事實の從來の觀察法を擴張するには、内觀法を擴張するより他に主要なる方法は今日まで發見せられて居ない。將來何等かの奇績に依つて、内觀方法に代るべき他の心的事實の觀察法の發見せられざる限り、吾人は内觀法を改良し、精密にし、擴張することに努力するの外はあるまい。前にも述べた如く、統計法によりて *Neues* が發見せらるゝけれど、その *Neues* の性質は客觀的のものであつて、心的事實ではない。従つて統計法は個人心理學の主要なる方法とはなり得ない。唯、心的事實を内觀する際に、少數の個人の内觀では、其の標式的なるものを確定し得ないから、自然科學の統計法適用の精神を個人心理學に輸入して、少數の個人の内觀的事實に換ふるに、多數の個人の内觀的事實を蒐集し之によりて、統計法は精

神の標式的過程を決定する補助手段となり得るのみであらう。サントはの初期に於ては統計法を心理學の補助手段と名けて居るが、而し氏は之によりて新しき事實を發見する爲めに用ひんとして居る。余は統計法は個人心理學の材料たるべき新事實を發見し得ないから、他の重要な方法に對して之を補助手段と呼びたいのである。

統計法は標式的精神過程を確定する上に於て個人心理學の補助手段となるのみならず、精神の客觀的特徵又は條件の統計的結果は時に或は從來の内觀の遺漏粗雜を暗示し、新事實の存在を豫想せしめ、更に精緻なる内省の必要を知らしむることがある。かゝる場合に於ては、統計的結果は心理的事實の發見に間接に暗示的に參與するを以て、又一種の補助手段となるのである。

以上の所論に基き、統計法が個人心理學に交渉する點は、心理的事實の發見ではなくして、他の方法によつて發見せられたるもの、比較考察に在る。而して心的事實の發見に對しては、統計法は間接の暗示を與ふるに過ぎないと論決したい。

### 參考書

- (1) Watson, J. B. Behavior: An Introduction to Comparative Psychology. 1914.

- (2) Dodge, R. *The Theory and Limitations of Introspection*. Amer. Journal of Psy. Vol. 23; 214-229. 1912.
- (3) Fechner, G. T. *Elemente der Psychophysik*.
- (4) Wundt, W. *Grundzüge der physiologischen Psychologie*. Sechste Aufl. B. I. 1908.
- (5) Natorp, P. *Allgemeine Psychologie nach kritischer Methode*. 1912.
- (6) Parmelee, W. *The Science of Human Behavior; Biological and Psychological Foundations*. 1913.
- (7) Wundt, W. *Logik; Zweiter Band. Zweite Abtheilung. Logik der Geisteswissenschaften*. Zweite Aufl. 1895.
- (8) Stern, W. *Die Differentielle Psychologie in ihren methodischen Grundlagen*. 1911.
- (9) Kant, I. *Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft. Kant's gesammelte Schriften; Band IV. Herausgegeben von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften*. 1903.
- (10) Herbart, J. F. *Werke*, Bd. 5.
- (11) Wundt, W. *Kleine Schriften Bd. II*. 1911.
- (12) Wundt, W. *Beiträge zur Theorie der Sinneswahrnehmung*. 1862.
- (13) Wundt, W. *Lectures on Human and Animal Psychology*. Translated from the Second German Edition by J. E. Creighton and E. B. Titchener. 1901.
- (14) Wundt, W. *Grundzüge der physiologischen Psychologie*. Sechste Aufl. Bd. III. 1911.
- (15) Wundt, W. *Die Psychologie im Beginn des zwanzigsten Jahrhunderts*. Reden und Aufsätze. 163-261. 1913.
- (16) With, W. *Psychophysik*. Tigerstedt, Handbuch der physiologischen Methodik. Bd. III. Abt. 5. 1912.
- (17) 西田幾多郎博士 感情 哲學研究第二十八號 大正七年七月
- (18) F. Krueger und Spearman. *Die Korrelation zwischen verschiedenen geistigen Leistungsfähigkeiten*. Zeitsch. für Psycho. u. Physiologie der Sinnesorgane. Bd. 44. 1907.
- (19) Spearman. *General Intelligence, Objectively Determined and Measured*. Amer. Jour. of Psych. XV. 1904.
- (20) Spearman. *The Proof and Measurement of Association between two Things*. Amer. Jour. of Psych. XV. 1904.
- (21) Hart and Spearman. *General Ability, its Existence and Nature*. Brit. Jour. Psych. V. 1912-1913.
- (22) 植野謙太郎 心能の相關研究上の一問題 哲學研究 第三號 大正五年六月